

**[翻訳] エスラムス著 『子供たちに良習と文学とを
惜しみなく教えることを出生からすぐに行なう、と
いうことについての主張』 (翻訳・III)**

その他のタイトル	Declamatio de pueris ad virtutem ad literas liberaliter instituendis idque protinus a nativitate [499. C7-504. A13.] Desiderius Erasmus
著者	中城 進
雑誌名	教育科学セミナー
巻	23
ページ	75-87
発行年	1991-12-15
URL	http://hdl.handle.net/10112/00019479

翻訳

エラスムス著 『子供たちに良習と文学とを惜しみなく教えることを
出生からすぐに行なう、ということについての主張』

(翻訳・Ⅲ)

ロッテルダムのデジデリウス・エラスムスによる【翻訳：中城 進】

自然についてのことを今まで論じて来たのですが、自然というものはそのようには単純なものではないのです。というのは、それぞれの種類の生き物に固有の自然があるからです。例えば、人間の自然は理性の使用にあるのです。しかしながら、人間の自然にはそれぞれの人に独自の特性があります。例えば、ある者は数学の学習に、別のある者は神学の学習に、また他の者は修辞学や作詩法の学習に、また別の他の者たちは軍務に生まれ付きのものを示しております。大いなる力によってそれらの研究へと各人は駆り立てられており、それ故に何者も人をそれらの研究から遠ざけることは出来ないのです。嫌いな学問に精神を傾けることに更に熱を入れさせて突き進ませても、ますます激しくその学問を嫌いにさせるばかりなのです。私はそのようなある若者をよく知っています。その若者はギリシア語やラテン語をしっかりと習得していたし、また全ての自由学芸においても優れた成績を残しておりました。その若者を好意をもって育成をしていた大司教は、法律学の教師の講義を聴くことが出来るために必要な学識を習得することを彼に命じていました。しかし、その若者の内なる自然はその学習に反抗したのです。その若者は自分の嘆きを私に説明しました。というのは、彼と私は寝台を共用していたからでした。私は、彼に対して、彼の保護者の意向に従って振舞うことを奨励し、最初に煩わしきものでも後には軽きものとなるので、少なくとも自分の時間の一部分をそれらの研究にあてな

いと促しました。彼は、大仰な権威をもって生徒たちに教えている、半分ほど神がかった教師たちの驚くべき程の無知なることを私に話しました。私は、それらのことは軽蔑されることだが、それでも正しく教えられていることだけを取り出そうとするべきであるということを行い返しました。このようにして、私は何度も議論をして彼を促しました。「それらの学問を学ぶために精神を振り向けている時はいつでも、私の胸に剣が突き刺さっているかのように思われるのです」と彼は感情的になって言いました。人間の自然の故に、私はミネルバ⁽¹⁾の神を無視して無理やりに学問に駆り立てることを考えることはないでしょう。よく言われておりますように、闘技場に牛を引きずり出すべきではありませんし、またリラ⁽²⁾を愚か者に強いるべきでもありません。恐らく、このように認められた傾向というものは、幼い子供においてもそのようなしるしを見付けられるでしょう。星占いによって予言を得ようとする習慣を持っている人々がおります。彼等の判断がどれ程までに認容され得るものなのかということに対しては、その評価はそれぞれ各人の自由な行ないに任せおくことに致しましょう。しかしながら、このような予言は子供の特性を出来るだけ早く見付けることとなります。というのは、自然が私達に予め造り付けているものを私達がそれによって容易に理解するからです。“容貌とか身体の形や状態とかによって才能を推測するということは絶対に偽りである”とは私は思いま

ん。確かに、偉大な哲学者・アリストテレスは『人相学について』という書物を公にすることをためらいはしませんでしたし、その研究は無教養なことでもないし、不十分なものでもありません。満潮で順風という好ましい状態の時には航海は快適であるのと同じように、私達の素質という傾向に配慮したものを教えることも容易であるのです。ヴェルギリウスは耕作に適した牛や繁殖に適した雌牛を見出すことの出来るしるしをはっきりと示すことが出来ました⁽³⁾。荒々しい外見の牛は最良なのです。また、彼は、将来のオリンピック競技において役立つようになる子馬を探しあてるための目的となるものを示しました。「良き品種の家畜の子ならば、直ちに牧場の方に歩み出す」⁽⁴⁾。無論、あなたはこの詩を知っていることだと思います。“自然は人間に素質を与えてはいない”ということを感じる人は思い違いをしているのです。また、“自然が与え得た素質を観察によって知ることはできない”という人も誤っているのです。学習と練習とによって教えられるならば、人間の自然において教えられ難いものであるという学識は殆どありません。人間に対して教えることが出来ないものというものがあるのでしょうか。象に網渡りを教え、熊に無蹠を教え、ロバに道化を教えることが出来る、というのにです。要するに、誰も人間の自然を人の手によって変えることなど出来ないのですが、今まで私が示して来ましたが、私達はある方法によって人間の自然を助長することが出来るのです。

しかもなお、学習と練習というものは私達の勤勉さの中にあるのです。私達は日々の中で機械や技術が誰も動かすことの出来ない程の重い荷物を持ち上げることを見ているのですが、学習とは主としてここに明示されているものを意味しているのです。また、練習も重要性を持つものです。よく知られていることですが、古代

の賢人が言ったことのように⁽⁵⁾、練習が全てであり、練習は研究や熟考をするために必要な基盤に貢献するものなのです。勿論、学習は教え易さ⁽⁶⁾を必要としており、練習は辛苦を必要としております。しかし、“辛苦は幼い子供にとっては相応しくない”と言う人々がおります。また、そのような人々は、“未だに自分が人間であることを殆ど気付いていない子供に、真の学ぶ能力という教え易さが一体全体あるのでしょうか”と尋ねます。既に躰を形成することに適した子供に対して、“学問は相応しくない”とか“教え難さを持つ年代である”という意見に対して私は簡潔に反論を致しておきます。実際、良習にも初歩があるように、教育にも初歩があります。哲学⁽⁷⁾においても、哲学の習得の幼年時代、青年時代、成年時代があります⁽⁸⁾。良き天性を示す血統の子馬には、直ちに馬銜を無理やりに付けさせられることはありません。また、そのような子馬には、武装した騎乗者をその背に直ちに乗せられることもなく、無理をしない訓練によって戦闘への準備が教えられるのです⁽⁹⁾。農耕に向けた子牛は、すぐに鋤に繋がれて過重な働きをさせられるということはなく、また無理やりに鋭い突き棒で突かれることもありません。そのようにではなく、マロ⁽¹⁰⁾が優雅に説いておりますように、「最初は、柔らかい柳を使って作った首輪を子牛の首の回りに緩く結び付けるのです。子牛が自由に動くその首の束縛に慣れて来た時こそ、その子牛を連結首輪にもう一匹の子牛と共に軛をかけるのに適した時なのです。そして、それらの若い牛たちを結んで組合わせて足並みを揃えるのです。そして、やがて、牛たちは土の上のほんの少しの跡の付いた轍に沿って地面の上で空の荷車を引き動かすようになります。最後に、ブナで作った車軸をきしませる程に重い荷物を荷車に積み込まれて、連結した銅飾の轡を牛た

ちは引かされることになります。」⁽¹¹⁾

農夫は、牛の年齢を考慮に入れることや、また牛の力量に従って程よく訓練をすることを知っております。このように、私達の子供の教育にも絶え間ない注意深さを払うべきなのです。このことのために、自然は、その摂理において、特別の能力を小児に植え付けているのです。幼児は、私はそのように認めているのですが、キケロ⁽¹²⁾の義務や、アリストテレスの倫理学や、セネカ⁽¹³⁾やプルタルコス⁽¹⁴⁾の道徳論集や、聖パウロの使徒書簡を読んで聞かされるには、まだ充分には適してはおりません。しかしながら、この期間には、食卓での幼児の見苦しい行ないを戒めるべきですし、また模範をはっきりと示して正しく振舞えるように注意を払うべきです。教会に子供が連れて行かれた時には⁽¹⁵⁾、子供は跪き、手を組み合わせ、帽子を脱ぎ、身体のを敬虔な態度で振舞うことを教えられなければなりません。また、秘跡が執り行なわれている間は、沈黙を守り、その眼差しを祭壇の方に向けることを子供は教えられなければならないのです。子供は喋ることが出来るようになる前に、初歩的な従順さや敬虔を教えられるべきです。それは、成長してからの年代においてもしっかりと残るからですし、また真の敬虔さの成長を充分にもたらすことにもなるからです。生まれて間もない子供は、最初には、自分の親と他人とを識別することは下手です。子供は最初には自分の母親を、そして次には自分の父親を、認識することを学びます。それから、子供は次第に父親や母親を尊敬することを学び、従順であることを学び、愛することを学ぶのです。子供が憤怒を感じている者に対して接吻を与えることを親から命じられることによって、子供はその怒りから自分自身を解き放ち、その復讐心から自分自身を解き放つことになるのです。また、親から命じられることによって、う

るさいお喋りも止めることになるのです。そして、子供は年長者の前では起立するということを学び、また十字架象の前では帽子を脱ぐということを経験するようになるのです。

“良習の初歩は謙虚さにおいては重要なものではない”と思う人は、私の考えにおいては、大変な思い違いをしているのです。プラトン⁽¹⁶⁾はサイコロ賭博をしていたある若者を叱責しました。その若者は、このようなほんの些細な悪いことのために厳し過ぎる程に叱られている、と不平を言いました。その時に、プラトンは「サイコロ賭博は些細な悪であるのかも知れないのだが、慣れ親しむとそれは大きな悪徳となる」と言いました⁽¹⁷⁾。要するに、ごく些細な悪しきことに慣れ親しむことが悪徳を大きくすることなのです。従って、些細な程の善きことに慣れ親しむということは善を大きくすることなのです。しかも、幼き年代の子供は善きことを教えられ易いのです。それは、幼い子供が全ての習慣に対しての柔軟性を備えているからですし、また未だに何の悪徳にも染まっていはいないからですし、それにまた、真似るものが先にあればそれを模倣することを好むからなのです。幼い子供は、悪徳とは何かということを知るようになる以前に、至る所で悪徳に慣れ親しみます。殆どこれと同じように、良習も容易に慣れ親しむことが出来るのです。更に、最良の習慣を身に付けるためには、それ以前の歳に最良の習慣に慣れ親しむことです。幼い子供の頃の、開いている精神に習慣が形成されたら、それは長く存続し続けることになります。フラクウス⁽¹⁸⁾は、「自然を熊手で追い払おうとしても、自然は絶えず元に戻そうとします」⁽¹⁹⁾と書き表しています。このように書かれたことは確かに真実ではあるのですが、しかしそこで書かれていることは十分に育った樹木のことについてであるのです。それ故に、賢明な農夫は、樹木

を成育させたらこのような形にさせたいと思う形に、苗木の頃にしっかりと形を整えます。完全に最初から介入すれば、すぐに生まれ付き与えられているものを変えることが出来るのです。粘土はあまりにも湿らせ過ぎますと力をかけて形を保有することが出来ないし、ロウは柔らか過ぎると形作るのには不適切なものとなります。それに対して、若過ぎる歳ゆえに学習には適していないというような人は殆どおりません。

セネカは「学ぶことに関しては、歳をとり過ぎているということは決してない」と言いました。このことが真実であるのかどうかということについては私は知らないのですが、勿論、歳をとれば学ぶことには困難さが伴うこととなります。議論となることの外にあることなのですが、あまりにも若すぎて教育を受け難いという人は皆無であります。殊に、教えられることが人間にとって自然であることならば尚更です。何故かと言いますと、このようなことを私は既に述べたのですが、幼児は模倣を行なう欲望を備え付けた⁽²⁰⁾、独自の幼児らしさというものがあるのですが、幼児は自分が聞いたり見たりしたことを真似ようと振舞います。その振舞いを会得したことが明らかとなるとその子供は喜ぶのです。子供は猿であるかのようです。それ故に、このことから、幼い子供には初めから教育に適している生来的なものが備わっているということが推測されるのです。従って、人間として生まれるや否や、人間はすぐに様々なことを学ぶことに適しているのです。喋り始めるや否や、すぐに子供は文字を教えられ易くなります。何よりも決定的な理由は、子供はすぐに教えられ易くなるという能力を持っている、ということです。真に学識は限り無き便宜さを有するようになるのですが、その学識が良習に隷属するものでなければ、その学識は善きことよりも害あるものともたらされるものとなるでしょう。

学識ある方々の考えにおきましては、七歳以前の年齢の子供に学習を行なわせないと考える人に対しては正当なる拒絶を致します。そのような見解を最初に提出した人はヘシオドス⁽²¹⁾であると一般には信じられております。しかしながら、文法学者のアリストファネス⁽²²⁾は、『訓戒』のことについて公に述べているのですが、その著作はヘシオドスによって書かれたものではないと否定しております⁽²³⁾。それにもかかわらず、この著述家⁽²⁴⁾はかなりの名声を博した人であり、大変に良い評判をもって受け入れられた書物を著している人であり、識者の間においてさえもヘシオドスが書いたものだと思われているのです。ヘシオドスが記したかどうかという議論を離れても、ある人間の権威が私達を威圧してしまい、優れた人が述べる意見を聴き難くしてしまうということがあってはいけません。喩えこのような見解を受け入れるという人々でさえも、七歳になるまでの全ての時を当然の如く全ての教育的配慮を欠いたままで過ごさせようとは考えません。そのような人々は、七歳以前の子供を勉学の辛苦で苦しめないとか、暗記や暗唱や筆記のようなもので非常に不快な勉学の辛苦で抑え付けない、と考えているだけなのです。実際に、十分な刺激なしに物事に慣れ親しむことが出来るための、教え易く、御し易く、従順な素質を持った人間を見付け出すことは非常に困難なのです。クリュシピュースは、人生の最初の三年間は養育者に授けられている、と言っております⁽²⁵⁾。この期間は、教育におきましては、殊に振舞や喋り方におきましては、何もしないのではない、と言うのです。というよりも、この期間に、養育者や親によって優しい方法で良習や文学への準備を子供はさせられるべきである、と言うのです。また、養育者や親が子供の形成において大きな影響を与えるということは、議論を行なうまでもない

ことです。

子供における最初の教育とは、明瞭で正しい喋り方を教えることでしょう⁽²⁶⁾。昔の養育者や親は、程々の世話しかしない、ということはありませんでした。このような最初の教育は、雄弁さにおいて非常に重要な意義を持つだけでなく、正しく判断することや全ての知識を学ぶことにおいても非常に重要な意義を持つのです。勿論、言葉に未熟であることは全ての学問を、それは神学や医学や法学にまでも及ぶのですが、破壊し、醜化することなのです。グラックス兄弟⁽²⁷⁾は彼等の雄弁さを賞賛されました。しかし、キケロの判断によりますと、その賞賛は大部分は母親のコルネリア⁽²⁸⁾に負っていたのでした⁽²⁹⁾。キケロは、「それらの息子たちが母親の胸でよりも母親の言葉で教育されたのは明白である」と述べました。要するに、彼等には母の胸が最初の学校であったのです。そればかりではなく、カイウス・ラエリウス⁽³⁰⁾の娘であるラエリア⁽³¹⁾は、父親の優美な話し方と生き写しでした⁽³²⁾。このことは不可思議なことではないのです。というのは、幼い時から彼女は父親の腕に抱かれて父親の話をいつも聴いていたからでした。このような例は、カイウスの姪である、ムティア⁽³³⁾とリキニア⁽³⁴⁾の二人の姉妹にも見出されます。思い違いをしてはいないとは思いますが、リキニウス・クラッスス⁽³⁵⁾の娘であり、スキピオ⁽³⁶⁾の妻の一人であった、上記とは別のリキニアはその優美な話し方のために特別な称賛を与えられています。更に、他の誰かをそのような例として上げる必要があるでしょうか。全ての家族にまで、また孫や曾孫に到る子孫にまで、祖先の優美な話し方は大概是受け継がれます。クインツース・ホルテンシウス⁽³⁷⁾の娘は父親の優美さを写し出しておりました。クインティリアヌス⁽³⁸⁾の言うことによれば、彼女はかつて三頭執政官の面

前で演説を行なったのですが、それはただ単に女性としての名誉というものではありませんでした⁽³⁹⁾。養育者や家庭教師や子供の遊び友達は、真に、正しい喋り方において少なからぬ重要性を持っております。言語の習得に関して、子供は非常に教え易くあります。確かに、あまり精神を没入させることなく、知らない間にまた他の活動に没頭している間に、ゲルマニアの子供はガリアの言語を学びます。しかしながら、最も幼く最も未熟である子供にとっては、大きな成果を収めることは決してないのですが。発声されない音を書き表すような、またその独自性のあるシュウシュウという音や殆ど人間のようでない発音を有する、粗野で不規則な言語をそのように学んでしまうというのであれば、どうしてギリシア語やラテン語を容易に獲得することが出来ないということになるのでしょうか。ミトリダーテス王⁽⁴⁰⁾は、二十二の言語を熟知しており、通訳なしでそれぞれの地方の人々にそれぞれの言語で裁定を与えました⁽⁴¹⁾。テミストクレス⁽⁴²⁾は、ペルシア大王とたやすく話が出来るようになるために、一年間かけてペルシア語を徹底的に学びました⁽⁴³⁾。成人期にこのようなことが成し遂げられるのであれば、子供に期待が出来ないということがあるでしょうか。

何かを学ぶということ全てにおいて、記憶と模倣という、主として二つの能力に依っていることが一般には知られております⁽⁴⁴⁾。子供は、自然の模倣の欲求を持っているということはもう既に述べました。“子供には非常に優れた粘着性のある記憶力が与えられている”と最も賢明なる人は言います⁽⁴⁵⁾。彼等の権威に異論を唱えようとも、私達自身の経験上での出来事ではそのことを十分に私達は確信させられています。子供の時に見たものは精神にしっかりと付着され、それはあたかも昨日に見たかのように

付着されております。年老いた者は、今日に読んだものを二日後に再び読む時には、それが新しいもののように思うことになりがちです。また更に、言語の習慣ということにおいて大変に成功を収めたという成人をあまり見かけることはないとは思いませんか。喩え言語の習得に成功を収めても真に正しいアクセントと発音とを有している人は決しておりませんし、うまく成功を収めることは殆どあり得ないことなのです。そのような稀な例は共有すべき手本とはならないでしょう。年老いたカトー⁽⁴⁶⁾は年寄ってからラテン文学をまた七十歳からギリシア文学を学んだということ⁽⁴⁷⁾を口実として、子供が十六歳以降になってから言語の習得ということを子供に負わせるということを行なってはなりません。しかし、ウティカのカトー⁽⁴⁸⁾はその先祖よりも更に博識で雄弁でもあったのですが、子供の頃に家庭教師サルペドン⁽⁴⁹⁾を付けられておりました。

つまり、このように、幼い年頃の子供に更に特別な注意を払うことが必要なのです。というのは、幼い年頃の子供は判断力よりもむしろ自然の感覚力によって導かれるものですし、また恐らくは悪しきことも正しきことも一層たやすく獲得するからです。そればかりでなく、悪徳を忘れることよりも更に容易に正しきことを忘れ去ることになるのです。このことは異教徒の哲学者にも気付かれており、また驚きともなっております。しかし、彼等にはその原因を探し出すことが出来ないのです。キリスト教哲学が私達に示していることなのですが、その原因とは、最初の人類のアダム以来、悪への傾向が私達にこびりついているということなのです。このことについては間違いがあり得ないことなのですが、このような悪しき部分は汚れた交友や悪しき教育から生ずるということは正に真実であるのです。特に、幼い年頃においては全ての

ものが曲げられ易いのです。一つの物語がこのことを示しております。アレクサンドロス大王は、家庭教師レオニデス⁽⁵⁰⁾から子供の頃に、ある悪徳を吸収しました。大人になり、また最高の支配の地位に就いた時でさえも、その悪徳を捨て去ることは出来ませんでした⁽⁵¹⁾。それ故に、ラテン人⁽⁵²⁾がその古風な流儀を傷付けることなく誇っていた間は、ラテン人は雇い入れの教師に自分たちの子供を委ねようとはせずに、親自らがまた父親側の血縁者が、父方の伯父とか叔父とか祖父とかが、世話をした、とブルタルコス⁽⁵³⁾は証言しております。それは、高貴で優れた学識を習得している者が出来るだけ沢山いるということが一門の評判にはまず第一に関わるものだ、と彼等は考えたからでした。ところが、今日の殆ど全ての貴族は、絵を描かせたり、紋章を刻ませたりし、また舞踏や狩猟や賭博を行なっております。カルヴィリウス⁽⁵⁴⁾は、彼は条件付自由民⁽⁵⁴⁾であったのですが、また彼の保護者のカルヴィリウスは離婚を最初に行なった例として公に知れ渡っている人なのですが、読み書きを行なう学校を最初に開いた人として知られております。

かつては、良習と学識の教育をそれぞれの近親者に与えることは、何よりも優先する敬虔な義務を遂行することであるとされておりました。ところが今は、子供に対しての親のたった一つの世話は、子供に嫁入りして来る良き妻を探すことだとされています。このことを成し遂げれば、親は自分の義務を既に行なったと考えております。しかし、快楽を説き勧め、家において家庭教師に親の義務を委託し、そして自由の身に生まれた子供を使用人に引き渡して教育をさせようとするならば、人間世界は更に悪しきものへと成り易くなるでしょう。しかし、選択が行なわれる時にしっかりとした識別がなされる限りは⁽⁵⁵⁾、そのような危険性はあまりないの

かも知れません。それは、家庭教師が誤りを犯すかどうかは、親の眼差しの下に家庭教師が置かれて生活を送るだけでなく、親の支配の下に家庭教師が置かれて生活を送るということにかかっているのです⁽⁵⁶⁾。昔は更にもっと賢い親がおりまして、そのような親は教養を有した奴隷を買い取ったり、あるいは自分の幼い子供たちの教育を任せようとする奴隷に対して教養を教え込むという配慮を行ないました。また、親自らが自分たちの子供に教育を施すために教養を学び取る、という熟慮ある親もいました。確かに、このことは親と子との両者共に有益なことです。それは、司教が自身を敬虔な人間に育成し、それによって出来るだけ多くの人に敬虔なる熱意を起こさせることを可能にする、という両者共に望ましい状態にあるようなものなのです。

「そのことを行なうための暇が全くない」とか、「そのことを行なうことは非常に不快な労苦だ」と言う人がいます。しかし、非常に立派な人間は、私達が賭博や飲会や芝居見物や道化に多くの時間を浪費していることを充分に知っております。また、彼は、私達が子供の教育に費やす暇がないという理由を付けたり、しかもなお、私達が行なうべきことも全て無視していることなどを恥ずべきことだと思っております。私達が実直に時間を司るならば、全ての義務を果たす時間は十分に足りるでしょう。しかし、一日の大部分を浪費するならば、私達には、一日は短いものです。友人たちのつまらないことに、しばしば割かれている部分の多くの時間を更に考えてみるべきでしょう。全てのことに親しむことは殆ど出来ないことなのですが、子供たちへの義務を果たすことが第一に分別のある時間の割り方です。しかしながら、立派に増資させて光り輝くような相続財産を子供たちに残すことにおける労苦を、何故に避けようとす

るのでしょうか。あらゆる優れた相続財産であるとされるもの⁽⁵⁷⁾を子供に用意する労苦を、何故に不快なものとして理解するのでしょうか。殊に、私達の自然の愛情と最も高価なものである子供の成長とが、労苦や不快さというあらゆる厄介さを和らげることになる、というののです。このことが、長い間かけて、おなかの中で子供を育てたり乳を飲ませて育てるという不快なことを母親が辛抱する理由ではないのでしょうか。自分の息子を教育することを不快に感ずる人は、息子を少しだけしか愛していないのです。実際的には、学習は古代の人々の間においての方がより容易に行なわれた、と言われます。つまり、上手に文学を習得した者も無学な民衆も、全く同じ言葉を喋ったのです。とはいえ、教養を習得した者は、正確で優雅で慎重かつ雄弁に表現を行ないました。もしも今日まで同様なものとして保たれておりましたなら⁽⁵⁸⁾、学識はもっと豊かな量となっていたことでしょう。古代の模範を蘇らせようと努力する人もいないわけではありません。例えば、フリジア人⁽⁵⁹⁾のキャンテルム家⁽⁶⁰⁾のような方々がおられます。イスパニアのエリサベータ女王はフェルディナンド王の御妃であるのですが⁽⁶¹⁾、彼女は驚くべき程の学識と敬虔さを備えた女性を数多く輩出した家族の御出身なのです。英国におきましては、最も秀抜なる人・トマス・モア⁽⁶²⁾がおります。彼は、廷臣として国務に最も忙しく身を捧げている人であるのですが、妻や娘たちや息子の教師として、最初には敬虔さを次には両方の言語の知識⁽⁶³⁾を授けることをうるさがることはありませんでした。私達は、確信をもって、学識ある者へと目標を定めて、子供たちに世話を行なうべきです。通常に使われている言語を習得しなくなる、という危険性はありません。というのは、人々との関係の中において望もうが望まなくとも、子供はその言語を徹

底的に習得してしまうからです。文学的教養を習得している者が家族の中に誰もいないということでしたら、直ちに専門家を雇うことをお勧め致しますが、その専門家は振舞においても学識においてもしっかりとした人でなければなりません。カレ⁽⁶⁴⁾のような諺で言われておりますように、「あなたが雇おうとしている者が文学的教養や上品さを備えた人間ではないということをおあなたが知るために、息子を危険な目にあわせる」ということは愚かなことです。他のことにおいては眠りたくなるままにしておいても良いのですが、このことにおいては、あなたはアルゴス⁽⁶⁵⁾のようになってあらゆる眼をもって注意をしなければなりません。よく言われることなのですが、戦争においては二度も誤りを犯すことは許されません。このことにおいては一度たりとも過ちを犯してはいけない、ということは当然のことなのです。そして、更に、子供が教師に委ねられることが早い時期であればある程、教育はより豊かな成功を収めることとなります。

〔次の反駁的提案〕

勉学の辛苦が幼い小さな身体の健康を病弱なものにするという危険性はない、という十分な理由を私は知っております。このことには反駁し得るのですが、喩え強壯な身体を損なうことがあったとしても、その損傷は非常に優れた善き精神によって見事に補償されるのです。というのは、私達は競技者を形成しているのではないからです。そうではなく、私達は哲学者や国の政治の舵手とかを形成しているのであり、ミロ⁽⁶⁶⁾の強壯さはなくとも、彼等には恵み深い健康で十分であるのです。しかしながら、私は認容するのですが、子供たちに活力を生じさせる多少の配慮を行なうべきでしょう。しかし、過度に食べることに對しては非常に有害なもの

であって危険なことであるというようには恐れない人が、子供たちに文学を教えること對して恐れることは、非常に愚かなことなのです。過度に食べることは柔らかで小さな子供の身体をひどく損ないますし、またある種類の食べ物や飲酒はこのような小さな子供には適してはいないのです。親が子供たちを雑多で長ったらしい宴会に引き入れることがあります。また、時々、宴会が夜遅くなるまでかなり長く延ばされることもあります。塩辛いものや熱いものを、時々、嘔吐をさせるまで子供たちに腹いっぱい食べさせます。幼い小さな身体を煩わしい服装で縛り合わせたり着過ぎさせたりもするのですが、それは見せびらかしのためなのです。それは、ただ単に、子猿に人間の衣服を飾り立てるようなものなのです。また、他の方法によっても、自分たちの子供を柔弱にしております。しかも、このような親は、何等かの点で、幼い子供たちの健康のことを勉学のことよりも異常に恐れるのです。勉学というものは、全ての人に非常に有益なものでありますし、また全ての人にとって行なわれるべき不可欠な計画なのです。

健康に関して私が述べましたことは、外観の世話にも同様に当てはまります。そのことを全くなおざりにするべきではない、と私も認めます。しかし、過度に心配して配慮をすることは人間にとってはあまり適切なことではありません。しかし、ある人々は、勉学は身体を非常に損なうものとなる、と気難しい程に恐れています。大食、酩酊、不規則な徹夜、殴り合いに怪我、揚句の果てには罪に汚れた疥癬、これは自制心のない生活を送る若者においてはまず免れることが出来ないものなのですが、によって更に損なわれているというのにです。子供たちの健康と外観とを嘆き恐れるのでしたなら、勉学よりもむしろこのような事を子供たちから遠ざ

けておくべきでしょう。しかしながら、このこともまた、私達には配慮を用意することが出来ます。つまり、それは、最も少ない辛苦とそれ故の最も少ない損失ということを意味しております。あまりにも沢山のものを恣意的なやり方で幼い子供に注入するということが行なわれております。そのようなものではなくて、幼い子供に与えるものは、ただ最良のものであり、また子供の年齢に適切なものであり、そして微細なものよりもむしろ引き付けられるようで愛好されるものであるべきでしょう。更に、学習において魅力のあるやり方で教えられたなら、学習は辛苦ではなく遊戯のように思われるでしょう。このようなことは、言わばある種の誘惑によって幼い子供を謀ることなのです。このようなことを行なうのは、幼い子供にはその勉学が将来に手に入れるようになるものが、どれ程の報酬があるのか、どれ程の価値があるのか、どれ程の喜びがあるのかということはまだ理解できないからです。学習におきましては、ある部分では、形成者の穏やかさや快活さが役立つものとなります。また、ある部分では、創意や工夫が役立つものとなり、それらは様々の方法を考案するものとなります。様々の方法とは、子供に勉学することは喜ばしいものであるということを生じさせ、辛苦であると感じることを取り去ることなのです。実際には有害なものでは決してないのですが、勉学を憎みはじめる以前に、また愛すべきものを理解し得る以前に、教師の性格が引き起こしてしまうことがあります。学ぶということの最初の段階は、教師の愛情であるのです。時間の進みと共に生ずることなのですが、教師に従って勉学を愛しはじめる以前の子供は、教師を好きになって後に勉学に従うようになるのです。すなわち、このことは、最も高貴な名誉を有する御方々から送られて来ました、最も好ましいものとされる、極めて沢山の

の贈物のようなものなのです。このような具合に、勉学におきまして、幼い子供はまだ判断力をもって楽しむことが出来ないののでして、そして、この事のために、幼い子供は情愛のある教師に委ねられることになるのです。イソクラテス⁽⁶⁷⁾によって正しく言われたことですが、「最も多く学ぶ者は、熱望して学ぶ者である」。更に言いますと、私達が喜んで学ぶのは私達が敬愛する人からです。真に、全く不快な振舞の持ち主であり、自分の妻にも愛されない者がおります。彼等は陰険な容顔で、無愛想な接し方を行ない、彼等が機嫌の良い時でさえも怒っているように見えるのです。また、彼等は優雅な話し方が全く出来ないし、更に相手からの微笑みに対して微笑み返すことさえも殆ど出来ないのです。誰かが分かり易く言っていることですが、「グラティアエ⁽⁶⁸⁾は、彼等が生まれた時には腹を立てた」。飼ひ馴らしていない馬を教え込むことを委ねる人間としては、そのような者はあまり適してはいない、というように私には思えます。ましてや、このような男が無力で乳離れしたばかりの幼い子供のためになるなどと考えることは、まず私には有り得ないことです。しかしながら、このような種類の人間が幼い子供の教師として概して特別に求められるべき人であると、人々には信じられております。というのは、そう信じる人々は、陰鬱な外貌を神聖なるものとして見なしてしまうからなのです。しかし、外面を信じることは安全ではありません。そのような者の陰鬱の仮面の下には、しばしば人間性を喪失した振舞が隠されているのです。貞潔な人間の面前では言及してはいけないことなのかも知れませんが、これらのごろつき共が子供たちに恐怖を用いて時には恥辱となることを行なっているのです。無論のことですが、ひどく恐れさせることでは、親でさえも子供を正しく教育することは出来ません。最初

の世話は愛情なのです。それは、恐怖を用いずに、自ずと生ずる敬意によって次第に子供を引き付けていくことであるのです。そして、このことは恐怖よりも有効性を持っております。

【註釈】

(1) ミネルバ[Minerva]。ローマ神話に登場する知恵、技芸、発明を司る女神。

(2) 「リラ」とは、古代ギリシアの豎琴のことである。

(3) Publius Vergilius Maro, *Georgics*. (Ⅲ.47~59).
ヴェルギリウス、越智文雄訳、『田園詩・農耕詩』、生活社、1947年。241ページから242ページを参照。

(4) Vergilius, *Georgics*. (Ⅲ.65).

(5) 「古代の賢人」というのは、エラスムスがディオゲネスの『ギリシア哲学者列伝』を踏まえているのであれば、ペリアンドロスのことを意味している。ペリアンドロスは「練習がすべてである」と述べている。

ディオゲネス・ラエルティオス、加来彰俊訳、『ギリシア哲学者列伝(上)』、岩波文庫、1984年。第1巻・第7章・99を参照。

(6) 「教え易さ」とは、それぞれの子供の素質あるいは適性のことを指している。

(7) 「哲学」という言葉は、ここでは知的・道徳的な一般教育の意味において用いられている。

(8) エラスムスは、「幼年時代(*infantia*)」、「青年時代(*adolescentia*)」、「成年時代(*maturitas*)」という進展の概念を保持しているように思われる。ここでは、エラスムスは、「哲学」の習得の進展の段階を述べているのであって、人間の成長や発達の段階を述べているのではない。

(9) Vergilius, *Georgics* (Ⅲ.144~166).

(10) マロ [Maro] とは、ヴェルギリウス[Publius Vergilius Maro : 前70年~前19年]のことである。

(11) Vergilius, *Georgics* (Ⅲ.132~137).

(12) キケロ [Marcus Tullius Cicero : 前106年~前43年] は、古代ローマの弁論家、政治家、哲学者であり、『義務論』や『国家論』や『法律論』等を書き残している。

(13) セネカ [Lucius Annaeus Seneca : 前4年頃~後65年] は、古代ローマのストア主義の哲学者であり、ネロの家庭教師を務めたことがある。『オエディプス』、『アガメムノン』、『道徳書簡』等を書き残している。

(14) プルタルコス [Plutarchos : 46年頃~120年頃] は、ローマ帝政時代のギリシアの伝記作者であり、倫理学者である。『英雄伝』『倫理論集』がある。

(15) エラスムスの『子供の礼儀作法についての覚書』を参照。

・エラスムス著、中城 進(訳)、『子供の礼儀作法についての覚書』(翻訳・第1章~第3章)、乳幼児発達研究所・研究紀要・No.6・乳幼児発達研究所、1989年5月15日。40-54。

・エラスムス著、中城 進(訳)、『子供の礼儀作法についての覚書』(翻訳・第4章~第7章)、乳幼児発達研究所・研究紀要・No.7・乳幼児発達研究所、1990年5月20日。67-82。

(16) プラトン [Platon : 前429年頃~前347年] は、古代ギリシアのアテナイの哲学者である。

(17) ディオゲネス・ラエルティオス、加来彰俊訳、『ギリシア哲学者列伝(上)』、岩波文庫、1984年。第3巻・第1章・38を参

- 照。
- (18) フラクウスとは、ホラティウス[Quintus Horatius Flaccus : 前65年～前8年] のことであり、古代ローマの詩人である。
- (19) Q. H. Flaccus, Epistolae. (I. 10. 24) ホラーティウス、田中秀央・村上至孝訳、『書簡集』、生活社、1946年。50ページを参照。「『自然』は、幾ら君が刺又で追沸つたところで、いつでも駈戻って来、何時の間にか君の誤った傲慢を突破って勝利者になるのです。」
- (20) 「模倣を行なう欲望を備え付けた」という見方を、幼児に関して取っている。
- (21) ヘシオドス [Hesiodos : 紀元前700年頃] は、古代ギリシアの叙事詩人である。『仕事と日々』や『神統記』という著作がある。
- (22) アリストファネス [Aristophanes : 前275年～前180年] は、ビザンティウム(Byzantium)出身の古代ギリシアの文法学者であり言語学者である。
- (23) エラスムスはクインティリアヌスの『弁論家の教育』(I. 1. 15～16) から示唆を受けている。
- (24) 「この著述家」とは、ヘシオドスのことを指している。
- (25) クインティリアヌスの『弁論家の教育』(I. 1. 16)を参照
- (26) クインティリアヌスの『弁論家の教育』(I. 1. 4)を参照
- (27) 「グラックス兄弟」。グラックス兄弟は、古代ローマ共和政末期の、土地改革に取り組んだ政治家であった。兄[Tiberius Sempronius Gracchus : 前162年頃～前133年] は、前133年に護民官に選出されて、農業改革を志して土地法案を提出した。弟[Gaius Sempronius Gracchus : 前159年～前121年] は、前123年に護民官に就任し、兄の志を継承して土地改革や政治の民主化に取り組んだ。
- (28) 「コルネリア」[Cornelia]は、グラックス兄弟の母親であり、スキピオ・アフリカヌス[Scipio Africanus]の娘である。
- (29) クインティリアヌスの『弁論家の教育』(I. 1. 6)を参照
- (30) カイウス・ラエリウス [Caius Laelius] は、有名な弁論家であり、前140年の執政官である。キケロが理想的な人物の一人として尊敬した人。
- (31) 「ラエリア」[Laelia]。
- (32) クインティリアヌスの『弁論家の教育』(I. 1. 6)を参照
- (33) 「ムティア」[Mutia]。
- (34) 「リキニア」[Licinia] 。
- (35) リキニウス・クラックス[Marcus Licinius Crassus Dives : 前112年～前53年] は、古代ローマの有名な弁論家であり政治家である。
- (36) スキピオ [Publius Cornelius Scipio : 前236年～前184年] は、古代ローマの将軍である。
- (37) クインツース・ホルテンシウス[Quintus Hortensius Hortalus : 前114年～前50年] は有名な弁論家である。
- (38) クインティリアヌス[Marcus Fabius Quintilianus : 35年頃～95年] は、古代ローマの修辞学者である。
- (39) クインティリアヌスの『弁論家の教育』(I. 1. 6)を参照
- (40) ミトリダーテス王 [Mithridates VI] は小アジアの Pontus の王である。
- (41) クインティリアヌスの『弁論家の教育』(X I. 2. 50)を参照
- (42) テミストクレス [Themistocles : 前528

- 年頃～前462年頃] はサラミスの海戦でペルシア軍を撃退した、アテナイの有名な政治家であり将軍であった。
- (43) クインティリアヌスの『弁論家の教育』(X I. 2. 50)を参照。
 プルタルコス、村川堅太郎編、『プルタルコス英雄伝・上』、ちくま文庫、1987年。テミストクレス・29 (192ページ) を参照。
- (44) クインティリアヌスの『弁論家の教育』(I. 1. 19)を参照。また、プルタルコスの『プラターク「倫理論集」の話』の中の『子供の教育』の章の360ページを参照。
 プルタルコス、河野与一選訳、『プラターク「倫理論集」の話』、岩波書店、1964年。
- (45) 「最も賢明なる人」とは、クインティリアヌスやプルタルコスのことを指しているように思われる。
- (46) 「年老いたカトー」とは、古代ローマの政治家・大カトー [Marcus Porcius Cato Censorius : 前234年～前149年] のことである。
- (47) プルタルコス、村川堅太郎編、『プルタルコス英雄伝・中』、ちくま文庫、1987年。カトー・2 (258ページ) を参照
- (48) 「ウティカのカトー」。ウティカ [Utica] とは、アフリカの町でカルタゴの西北にあり、大カトーの孫であるカトー [Marcus Porcius Cato Uticensis : 前95年～前46年] が自殺をした場所である。
- (49) 「家庭教師サルペドン」。Sarpedon。
- (50) 「家庭教師レオニデス」。Leonides。
 『プルタルコス英雄伝・中』、アレクサンドロス、5 (12ページ) を参照。
- (51) クインティリアヌスの『弁論家の教育』(I. 1. 9) を参照。
- (52) 「ラテン人」とは、古代ローマ人のことを意味している。
- (53) 「カルヴィリウス」。Spurius Carbilus。
- (54) 「条件付自由民」とは、奴隷の身分から解放された自由民のことである。
- (55) 家庭教師を雇う時には親がしっかりと注意や配慮をして家庭教師を選択すべきである、ということの意味している。プルタルコス、『子供の教育』の353ページから354ページを参照。
- (56) プルタルコス、『子供の教育』の360ページ、また364ページから366ページを参照。
- (57) 親が習得した知識や振舞や言葉や習慣や慣習行動などの“文化資本”のことを意味している。
- (58) “教養層も一般民衆も全く同じ言葉を喋る”という状態の保持、ということの意味している。
- (59) Phrysia。フリジア人とは、紀元一世紀にオランダからベルギーにかけての中部方面の沿岸にいた西ゲルマン民族を祖先に持つ人々のことを指している。
- (60) Canterum。カンテルム家は、オランダの名門であり、フリジア人である。
- (61) エリサベータ [Elisabeta]とは、1469年にアラゴンのフェルディナンド王と結婚した、カンテルム家のイサベルI世 [Isabell I : 1451年～1504年] のことである。1474年から1504年にかけて、カスティール女王となっている。
- (62) トマス・モア [Thomas More : 1478年～1535年] は、英国の政治家、人文主義者であり、『ユートピア』の著者である。またエラスムスの友人でもある。
- (63) 「両方の言語の知識」とは、ギリシア語とラテン語のことである。
- (64) 「カレ」[Care]とは、一般に知られてい

る諺のことをエラスムスは意味しているように思われる。

- (65) 「アルゴス」[Argus]とは、ギリシア神話の、百の目を持つ巨大な怪物のこと。
- (66) 「ミロ」[Milo]とは、半ば伝説化したギリシアの競技者であり、オリンピックゲームでの勝者である。
- (67) イソクラテス [Isocrates : 前436年～338年] は、アテナイの有名な弁論家であり、前392年頃にアテナイに学校を創立してプラトンの学園と人気を競った。
- (68) グラティアエ[Gratiae]とは、ギリシャ神話に登場する、美・魅力・喜びを司る三姉妹神、Aglaiā、Euphrosyne、Thaliaのことである。

☆☆☆『子供たちに良習と文学とを惜しみなく教えることを出生からすぐに行なう、ということについての主張』の訳出にあたって

ここ数年間、“教育とは何か”という根源的な問いを探求の動機として、私は“教育の誕生”期以前にまで遡って考察を深めようとして来ました。今回もこの探究の動機に基づいて、エラスムスの『子供たちに良習と文学とを惜しみなく教えることを出生からすぐに行なう、ということについての主張』を訳出することに致しました。エラスムスのこの教育的な著作は、現在の視点からしますと、その内容や表現においてかなり相当に問題を含んだものであります。しかしながら、十六世紀には“教育なるもの”

がどのように考えられていたのかを知るための歴史的な資料の一つとしてエラスムスのこの教育的な著作を訳出するという動機から考えますと、エラスムスによって書かれたラテン語の文章を忠実に訳出する方が良いように思われました。それ故に、当訳文におきましては、原典を忠実に訳出しました。出典は、ヨアンネス・クレリクス(Joannes Clericus)の編集によります『Desiderii Erasmi Roterodami Opera Omnia・Tomus I』の、ヒルデスハイムのゲオルク・オルムス(Georg Olms)書店からの復刻版(1961年)の487～516からであります。今回発表しました「エラスムス著『子供たちに良習と文学とを惜しみなく教えることを出生からすぐに行なう、ということについての主張』(翻訳・Ⅲ)」の翻訳におきましては、499. C 7. から504. A 13までです(*)。なお、(翻訳・Ⅰ)は、冒頭部分の487から495. B 2. であり、関西大学教育学会・『教育科学セミナー』第22号(1990年12月発行)に、また(翻訳・Ⅱ)は、495. B 3. から499. C 6であり、乳幼児発達研究所・研究紀要8(1991年7月発行)に掲載させて戴きました。ご参考下さい。

(*) Erasmus, Desiderius, *Declamatio de pueris ad virtutem ac literas liberaliter instituendis idque protinus a natiuitate*, Joannes Clericus(Ed), 『Desiderii Erasmi Roterodami Opera Omnia』・Tomus I, Hildesheim : Georg Olms, 1961. 487-516. [499. C7-504. A13].